
転生者は咲夜さん？

NA SU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者は咲夜さん？

【Nコード】

N0956BA

【作者名】

N A S U

【あらすじ】

テンプレ的展開により『ネギま』の世界に転生することになった。本当はデイオになりたかったのだが……どう見ても咲夜さんです、本当にありがとございました。性別は勿論女、にも関わらずイケメン咲夜さんの顔。恋愛なんて諦めて細々と原作介入しよう……。

Part・0 (前書き)

皆さん初めまして、

『N A S U』と申します。

初なので駄文、読みにくい、誤字脱字などありますが時間が
ある時などを使って頑張って書いていこうと思います。

Part・0

突然だが俺は転生者だ。

……いや、頼むからそんな目で見ないで下さい。本当の話なんです。テンプレなんですよ。

俺が死んだ理由は、コンビニに入ろうとしたら後ろから車が突っ込んで来たからだ。

たまにテレビでやってる衝撃映像だかなんだかの死んじゃったパターンだな。

そして気がついたら真っ白い空間。オタクだった俺はすぐに理解したね。

これがテンプレか、と

そこからは大体予想通りだった。少し違ったのは容姿を選べず、選んだ能力によって容姿が決まってくるという事と、転生者は15人まで同時に存在出来るという事だ。

例えば、『王の財宝』を選べば容姿はギルガメッシュになりやすくなる。

そういう訳で俺は『ザ・ワールド』と『ナイフ使いの才能』を希望した。ここまで言えばわかるだろう？

俺はデイオになりたかった。ナイフの才能を希望したのは俺の見ただ格ゲーでナイフを投げまくっていたからだ。あれはきつと相当な

技術が必要だと勝手に思った。

因みに俺の行く世界は『ネギま』らしい。

俺はこれからの事を考えてすっかり忘れていた事があった。

確実にデイトになりたければ吸血鬼になる必要があったこと。そして二次創作や、とある格ゲーで『ザ・ワールド（以後、世界）』を使う『完璧で瀟洒なメイド』の存在を。

Part・i (前書き)

書き方がよくわからない……

どうしてあんなに文字をかけるんだ……

Part・1

「なぜだ……。」

鏡の前に立って呟いたのは3歳位の少女だ。髪の色は銀色で目の色は赤と言うより紅色だ。彼女は子供とは思えない口調で子供らしく叫ぶ。

「なんで、でいおじゃないんだあああああ！！！！！！」

俺は生まれた時から望みを捨てなかった。生まれた時に両親が

「かわいい女の子だ！」

とか叫んだ時も、

「この娘の名前は咲夜だ。」
と言われた時も、

「お前に似て銀色の髪をしている。」

と話してた時も、

俺は『きつと女の子で咲夜という名前だがきつとディオの2Pカラー的な感じで銀髪のディオな見た目』という無駄無駄アな仮説を頑なに信じていた。

…… たつた今打ち砕かれたが。

「わかっていたさ……、名字だって十六夜だったし、そもそも女に生まれた時から予想はしてたんだ。」

認めたく無かったただけだが。

因みに両親とも魔法使いである。だが、どこかに所属している訳ではなく大戦を機にフリーの魔法使いとして旧世界に來たらしい。

偶に政治家らしき人も依頼に來るらしいから中々の腕前らしい。母さんの話では十六夜家の伝統だかなんだかで4歳の誕生日に十六夜専用のアイテムが貰えるらしい。

……なんか神の意思を感じる。早く4歳にならないかなあ……。

キング・クリム（ry

4歳

今日は誕生日なんです。が両親の仕事の都合で現在エジプトにいます。

なんでも政治家の護衛だそうです。面倒くさい。小さなホテルの1フロア貸切で宿泊中の俺達は誕生日会と言うよりは家宝を譲る儀式見たいな雰囲気です。

「これが十六夜家に伝わる家宝だ。」

そう言っ父さんが取り出したのは懐中時計。神はそこまで咲夜にしたいか、チクショー。

「これは只の懐中時計ではない。魔法球を改造したものらしく、この中からは無限にナイフが出せる。今からこれを咲夜渡すから1日身につけていなさい。」

「わかったよ父さん。」

そう言いながら時計を受け取る。

「手を近づけて念じれば出てくる。わかったか？」

とりあえずナイフを出したり消したりしてみる。よし、覚えた。

「明日は早いからもう寝なさい。」

「その前にトイレ行って来るわ。」

時計をポケットにしまい、トイレに入る。そして鍵を掛けた瞬間に

大きな振動と爆発音が聞こえた。

Part・2 (前書き)

こんな駄作を読んで下さった皆さん、ありがとうございますううう
う!!!!

はつきり言って全然自信ないんですけど……
まともに書ける様に努力します(´・`・´)

Part・2

くそつ、ホテルが爆発って規模は違うがケイ〇ス先生と同じ状況じゃないか！ていうか崩落してるじゃないか、このホテルは！！

「うわぁっ」

まずい、足場がつ！

俺の身体は落下を始める。言い忘れていたがここは4階。高そう
で低い微妙な位置だ。

「くそつ、いい加減に出てこいよ、『世界』ッッ！！」

だが出ない。俺が生まれた時から試しているのだが、『世界』は
一度も出た試しがない。もしかしたら神のミスで出なくなってその
お詫びとして懐中時計をくれたのかもしれない。

だんだんと地面が迫って来る。俺は…死ぬのか？
そう考えた瞬間から耐え難い恐怖が身体を駆け巡る。

嫌だ、死にたくない。

ただその言葉だけが頭の中を埋め尽くす。だが地面はどんどん迫
ってくる。そんな中俺に出来た事は、ただ叫ぶだけだった。

「ああああああ！！！」

だが俺は助かったらしい。地面に激突するのが怖くて目をつぶった俺は気が付けば父さんの腕の中にいた。

「大丈夫か、咲夜。」

「父…さん？」

父さんは身体の至るところから血を流し負傷していた。

「な…んで…」

「咲夜、早く逃げなさい。あっちに向かって真っ直ぐに走りなさい。」

父さんが指した方向には繁華街があった。

「政府の方や護衛の一部はあっちに向かった。合流すれば安全なはずだ。さあ早く、走りなさい！！」

父さんに場所を教えられた瞬間から俺は走りだしていた。ただ逃げる事しか考えてなかった。

だから気付けなかった。

後ろから聞こえた筈の父さんの悲鳴も。

視界の端に一瞬、だがはつきりと見えたはずの切り刻まれた銀髪の女性の死体も。

「ハア……ハア……」

ただ走って、走り続けて、俺は広場の様な場所に辿り着いた。そこには高そうなスーツを着た政府の人や、銃火器を持った護衛の

死体があった。その真ん中に1人の男が立っている。

「おい、十六夜のお嬢ちゃん……時計持ってるだろ？俺にくれや。」

「なんで……」

それだけ言うのがやっとだった。この男には見覚えがあった。父さんや母さんと何度か一緒にいるのを見た。護衛のはずだった。

「なんでかって？依頼されてたんだよ、この政府のゴミを殺れって。」

「そして十六夜のお宝を持って来いってなあ！」

なんとなく予想はしていた。ナイフをだすだけだが仕組みが解れば強力な兵器を作れる。核を無尽蔵に出せる様になるかもしれない。狙われるのは必至だった。

「もう生きてるのはお嬢ちゃんだけだ。俺だって子供を殺すまでは腐っちゃいねえ。」

そう言いながら男は持っていた杖をしまい銃を構える。

「大丈夫だ、『殺しは』しない。」

男が笑ったのと吹っ飛んだのは殆ど同時だった。

「やれやれ、人の縄張りで何をしているかとおもえば……」

見間違える筈が無かった。

「誰だデメエは!！」

見間違える筈が無かった。長身で、紅い目をしていて、そして何より首にある『星形』のアザ。

「この野郎ッ!！」

男が銃を乱射するか全て何かに弾かれる。

「貴様…、この『ディオ』に対する無礼、許されると思っなッ!！」

そこにいたのは俺が望んだ、憧れた人物

ディオ・ブランドーがいた。

Part・2（後書き）

いきなりですが、後々登場させようと思っている東方キャラについてアンケートを取ろうと思います。

無理に投票しなくても大丈夫です、はい。

あ、1人一票までですよ）、・・（

以下が候補です。

- 1 さなえさん + 法王の緑
- 2 うどんげ + 皇帝
- 3 どっちも出そうぜ！

この他にも案があれば遠慮なく言って下さい。私が気に入った物があれば候補にあげます。以上です。

Part・3 (前書き)

質問にもあつたのですが、今は大戦も終わってアリカも救出した後です咲夜は真帆良から原作入ります。

あと、スタンドについてですが、漢字からカタカナに直すことにしました。読みにくいかも知れませんが許して下さい(´・`・´)

Part・3

現在俺はディオ様（流石に呼び捨ては無理）に連れられてある場所に向かっているらしい。どうやら仲間がそこにいるらしい。

え？さっきの男はどうしたって？空烈眼刺驚（目からビーム）で一撃だったよ。あいつは話を聞かなかったからな。

そういえば彼も転生者らしい。もっともそれについて詳しく聞くこととしても

「後で話す。」

の一点張りだが。

だけど、いつ転生したか位教えてくれてもいいと思うんだけど……。

考えながら歩くこと20分。どうやら到着したらしい……が……

「そのまんまじゃないか……。」

どう見ても『DIOの館』です、本当にあり（ry
ていうかこの世界ってネギまだよな？ジヨジヨじゃないよな？

「着いていい。」

それだけ言って歩きだすディオ様。うーん、仕えてる訳でもない

のに様付けつていうのもなんだかなあ。

「って、早い早いよ、置いてかないで!!」

流石ディオ様、とても真似できないスピードで歩いていく。そこに痺れ（ry

そういうわけで館に到着。入り口である門にはジョジョの原作通り一匹の鳥、確か隼のペットシヨップと、

原作ブレイクな犬、ていうかイギーがいた。え？なんでここにいるの？そもそもジョジョキャラがいるって事自体ツツコミたいのになんで敵の本拠地の門番なんかしてるの？

てかスゲー警戒されてるし、凄く吠えてるし。入れないんだけど。

「やれやれ、イギーにも困ったものだ。」

そういつて何かを取り出すディオ様。まあただのコーヒーガムだけど。それをイギーの前に放る。その途端俺には目もくれずに食べはじめるイギー。

それでいいのが、イギーよ。

その後、ディオの私室に案内された。ここまで来る途中に色々見

たことある方々がいました。主にスタンド使いの方々ですけどね！！

「さて、さっきも話したが私は転生者、ディオ・ブランドーだ。」

「俺……私は、十六夜咲夜です。」

「君の前世は男のようだな。ならば言葉遣いは無理に直さなくてもいい。」

「……すみません。」

自己紹介も済んだし色々聞こうと口を開きかけたが、彼から話してくれた。

「まず君には色々聞きたい事があると思うが先に私が話をしよう。それから質問があれば何でも聞くといい。」

そういつてから彼は話し始める。

「そうだな……、まずは」

「と、いうわけだ。何か質問はあるか？」

ディオの話。それは彼の生まれから始まった。どうやら彼の父親はダリオと言っらしい。そしてダリオが死にジョースター家に預けられたらしい。

ここまで話せばわかると思うがどうやらこの世界はネギまを中心としているが世界を探せばゲームやアニメのキャラクターがあり、それに基づいたストーリーもあるらしい。最もネギま自体をおかしくするような、例えば時空管理局が出てくるようなストーリーは無いらしい。海鳴市はあつたみたいだが。

そういうわけでジョジョのストーリーもあつたらしいがディオである彼は転生者だ。養父であるジョージ・ジョースターを殺すつもりは無く、普通にジョナサンの友人として生きてきた。

しかし何者かがジョージを毒殺しようとし、ディオは濡れ衣を着せられて、その成り行きで石仮面を被ってしまったらしい。そこからは物語は進むが最終的にジョナサンとは和解し、今はSPW財団とも手を組んでいるという。

そして今、彼らは原作の保護をやっているらしい。保護というのは過激な転生者を始末する仕事だ。力に溺れ、欲望を曝け出し、他人を見下す様な奴らを既に彼自身も10人程殺したらしい。

そして最後に聞いたのは、彼と契約すると既出のスタンドがアーティファクトになる、という話だ。因みにディオも含め、彼らは本物のスタンドらしい。

「その話は本当なのか？」

「これが本当なら俺は……」

「ああ、間違いないだろう。先日、電信柱………ポルナレフが拾っ

てきた、確か妖夢だったか。彼女も仮契約をした際に『シルバー・チャリオッツ』を手に入れた。信憑性は高い。」

……………俺は突っ込まない、突っ込まないぞ。

とりあえず俺は席から立ち上がり、

「仮契約してくれ。」

この際キスしてでもアーティファクトが欲しい。まだ決まった訳ではないが間違いなく『ザ・ワールド』が手に入るだろう。キスくらい安いものだ。

「いいだろう、着いてこい。」

案内されたのは大きな魔方陣が描かれた部屋。既にディオ様は部屋に入って何か準備をしていた。

準備？

「なあ、仮契約ってキスじゃあ無いのか？わざわざ準備する必要無いだろう？」

そう尋ねると彼は立ち上がり、

「なんだ、知らないのか？確かにキスが一番楽だが方法は他にも色々ある。この部屋は既に面倒な作業を終えた契約用の部屋だ。さっさと終わらせるぞ。」

そういえばそんな話もあったな。すっかり忘れていた。そして後半は知らない、初耳だよ。なんだその技術は。

仮契約は無事に終わり、俺の手には一枚のカードがある。

「アデアット」

一瞬カードが光り形を変えていく。そこには

「ふむ、やはりな。」

「やっと、やっとだ……。」

この日、ようやく俺は『ザ・ワールド』を手に入れた。

Part・3 (後書き)

因みに前回出番が終わった両親の強さですが……

第4次聖杯戦争のアッサシンの活躍くらいの強さです。
敵だった男は北斗のアミバくらいの強さです。

……基準と表現が微妙すぎて泣ける。

Part・4 (前書き)

そういえばガンダムキャラがIS世界に行く小説はたくさんあるけど、ISキャラがガンダムの世界に行く小説って見たこと無いですよね。誰か書いてくれないかなー。チラッ

どうもこんにちわ、十六夜咲夜です。『ザ・ワールド』を手に入
れてからデイオ様のところでお世話になっていきます。あれから両親
の事を思い出し一日程泣きじゃくっていましたが、落ち着いた頃に
スカウトされたので、まあ成り行きで。何故スカウトしたのか聞い
たところ、

「最近ジョルノがヨーロッパの方に行ってしまったね、丁度空気が
あつたのだよ。」

って言うてました。まあ本音は『ザ・ワールド』でしょうけどね。

……だめだ、敬語は慣れない。戻そう。

敬語には慣れないがデイオ様と呼ぶ事に違和感を感じなくなっ
てきた。違和感どこいったし。

精神は身体に引っ張られるって誰かが言ってた気がするけど、それ
なのかね？身体は咲夜さんだから吸血鬼に従者として仕える事が普
通に感じるのかな？それだと確かエヴァンゲリオンだかAKI47
だかそんな名前の吸血鬼幼女がいたような……、やめよう。怖くな
ってきた。

そして今俺は何をしているかと言つと……

「王の財宝ツツ！！！」

転生者を始末しています。うん、わかってるさ。展開が急つて事

ぐらい。でも仕方ないんだ。仕方ない。

さて、目の前には様々な宝具を射出しようとしている英雄王（転生者）が。いやはっきり言って負ける気がしないんだよね。

「この俺の邪魔をするなら死ぬエエエエ！！！！」

と、叫びながら攻撃してくる英雄王もどき。確かに当たれば即死なんだろうけど……

「『ザ・ワールド』！！時は止まる！！」

ね、簡単でしょう？これは油断していると慢心しかねない。慢心王の目の前で慢心するのも面白そうだが。

それにしてもかなり撃ってるなあ。剣槍斧刀弓銃…弓銃って撃つていいのか？おい、なんであそこに剣モップバールバットがあるんだ。あれか？エクスカリバー、って事か？こいつ本物の馬鹿だな。

とりあえずまだ20秒弱しか止められないのでナイフを出して投げる。そして相手の背後に回ってから、

「そして時は動き出す。」

「なにツツ！！」

叫び声を上げる暇も無く命を落とす転生者。同情する気にも慣れない。俺が殺意を見せただけでやれハーレムだのなんだの男は邪魔だから消えろとかふざけやがって。神罰です。

「あーあー、咲夜だ。英雄王もどきは始末した。迎えを寄越してくれ。」

「了解した。帰還中のへりを一機そちらに向かわせる。」

この転生者始末はディオ様のグループとSPW財団が協力して行っているのでヘリなんかは容易に手配出来る。てかもう来たし。

ヘリが降りてくるまで転生者について考える。転生者は同時に15人までしか存在出来ない。同時に存在出来ないだけであって、1人死ねばまた新たに1人転生するということだ。ディオ様は常識のない転生者を殺し続け、常識ある転生者で15人満たすことが目標だと言った。はっきり言ってキリがない作業だと思う。いくらディオ様でも勝てない敵が現れるかもしれない。

「……まあ、考えたからって変わる訳じゃない、か。」

とりあえず今はディオ様に従おう。

………今普通に従おうって言ったよな、俺。

「咲夜さんじゃないですか！任務だったんですか？」

「まあな、それより離れる、近い。」

「私もようやく『アヌビス』を使いこなせる様になっただんですよ！

！これで咲夜さんと一緒に戦えますー！」

「わかった、わかったから離れる、離れるってんだろ！『ザ・ワールド』！」

ザ・ワールドの無駄遣いは置いて、なんか妙に懐いてくるこいつが、前にディオ様が話してた『シルバー・チャリオッツ』のアーティファクトを持つ女の子、魂魄妖夢だ。いや、突っ込まないで放置してたらいつのまにか相棒クラスまで来てたんだよ。

普段は冷静で真面目なんだけど戦闘の後になると決まって俺に絡んでくる。はつきり言っただけで面倒くさい。見た目も妖夢で原作通りなんだがこのふよふよ浮いてる半霊。どっいうわけかシルバー・チャリオッツになるんだよ。

因みに妖夢は転生者ではない。ここ重要。

「咲夜さん、ディオ様の所に着くまでデュエルしましょうよ！」

「咲夜でいいって言わなかったか？まあいいけど。」

その後は特に事故も無く無事に帰りました。え？デュエルはどうしたって？もちろん勝ったよ。アルカナフォース　　ザ・ワールドが負けるわけない。ディオ様には勝てないけど。

Part・4 (後書き)

妖夢はアンケート関係無しに最初から出すって決めてました。ア
ヌビス神の剣はディオ様から借りてるだけです。

きみよんな設定(前書き)

というより紹介

かなり支離滅裂な内容になりました！スキップしても構いません！

アンケート締め切ろうと思います。たくさんの意見等ありがとうございます。結果は次回をお楽しみに！！

言わずと知れた諸悪の根源。この小説ではいい人。アザは知らない内に出来てた。ご都合主義です。スタンド使いを束ねて原作を程よく守る人。因みに転生者に対しては、登場人物と恋愛してもいいけど常識外な事したら潰す、みたいな感じ。カリスマ溢れる。

好きな言葉は「弱肉強食」

嫌いな言葉は「モブキャラ」

言ってみたい言葉は「お前はもう死んでいる」

好きなキャラはジエダ、吸血鬼全般

因みにカードゲーム負け無し

魂魄妖夢

女

戦闘スタイル

近距離

デイトに仕えると言うより咲夜に従う女の子。LOVEではなくLIKE。ここ重要。現在デイトからアヌビス神を預かっている。刀二本、アヌビス一本、チャリオツツのレイピア一本の計四本の四刀流で戦う。既にチート。でも咲夜には勝てない。料理が得意。妖夢です。胸は咲夜よりはる。咲夜の言葉使いを直すため奮闘中。好きな言葉は「一刀両断」

嫌いな言葉は「銃は剣より強し」

言ってみたい言葉は「アバンストラッシュ」

好きなキャラは咲夜さん

……………あれ？

おまけ アヌビス神を使いこなした瞬間

「さあ妖夢…俺に従ええ。お前は負けなくなるう……………お前に切れない物等ないい。」

「違いますっ！！切れない物はあるり無いんです！！！」
「いいや、俺は全て切れるう。」

「じゃあデイト様も切れるんですね？」

「なん…だと…」

「……………」

「……………」

「切れない物など…」

「あんまり無い。」

きみよんな設定（後書き）

現在、家族で夢の国にいたので中々書けません。すません。

関係ないですけどレストランのメニューにプロシユートってあると
「兄貴イイイイイ！！」って叫びたくなります？

Part・5 (前書き)

とりあえず真帆良入りさせた。色々ネタは浮かぶんだけど……

Part・5

「キング・クリムゾンッッ！」

「はい、キンクリ頂きましたー。ありがとうございます、ボス。」

「おい、ちょっと待て。まさかそれを聞くためだけに電話したのか、ドッピオ？」

「はい。」

「この俺がそれだけのために呼ばれただど？ふざけるな！」

「でもボス、先週もオフアー来てたじゃないですか。うちの小説でもキンクリしてくれーって。それにかなり売れてるんですよ、キンクリボイス。じゃあまた連絡します。」

「おい、おいドッピオ、話を聞けえええ！！！」

「先週、財団から送られてきた写真だ。」

そう言ってディオ様が見せたのは3人の子供の写真。

「上から

カルマ・スプリングフィールド、ネギ・スプリングフィールド、アスカ・スプリングフィールドだ。」

一番分かりやすい転生パターンだな。原作にかなり関わりやすくなる。

「現在、オインゴを向かわせている。報告の内容によって、彼らが我々の保護対象になるのか、あるいは……

標的になるかが決まる訳だ。」

真剣な表情で語るディオ様。それ程彼らの立ち位置は厄介なのだ。原作に一番関わりやすく、親が親なので下手に始末できず、最悪ネギに影響を与えて原作など崩壊する。

「咲夜、妖夢。お前達を真帆良に送る。『フォーチュン』と『ストレングス』に運ばせる。良いな？」

「了解しました。」

と、いうわけで真帆良にやってきました。今日は編入試験を受けに来ただけだが。ディオ様は昔2人送っていたらしくその2人が迎

えに来るらしいのだが……

「あれじゃないですよね？」

「まさか、あれな訳無い……で……」

ああ、そういえば言葉使いが咲夜になりました。精神面以外全部咲夜ですね。妖夢のせいだが。そんなことはどうでもいい。

私達に近づいてくる2人組。片方は緑髪の普通？の女の子。だがもう1人、

何故ウサ耳を付けている？

確かに見た目が東方だから無いと違和感があるのはわかる。だがはっきり言ってウサ耳は浮く。だって周りの人なんか若干引いてるもん。「えっと……、デイオ様の刺客？ 作業員？ ですか？」

「従者です。」

「ですよー。」

お前は何を言っているんだ。

「予想はしているかと思いますが、私は東風谷早苗です。『ハイエロファント・グリーン』のアーティファクトを所持しています。」

「私は鈴仙・優曇華院・因幡よ。鈴仙かうどんげでいいわ。アーティファクトは『エンペラー』よ。」

間違える方が少ないと思うが。まあとりあえず質問だ。

「そのウサ耳は何ですか？」

頼むからまともな解答をしてくれ。ウサ耳の時点でまともでは無い気がするけどまともな解答をしてくれ。

「ああ、これ？元々は普通のカチューシャだったんだけど大学の束っていう先輩とウサ耳について1日語り合ったら貰った。」

束って誰だああああ！！！！何かよくわからんけどE.S.的な臭いがプンプンするぜー！！

「因みにこのウサ耳には聴覚強化とリーダー機能がついてるらしいわ。」

「らしいって……聞いてないんですか？」

流石は妖夢だ。ナイスな質問だ。

「途中で

篝ちゃんが私を呼んでいる！！

って叫んで飛んでいった。」

………凄く不安になってきた。もう確定じゃないか。

「とりあえず試験会場に案内します。ついてきて下さい。」

編入試験は普通の教室を使って行われた。大体150人ほど受けて、30人ずつ分けられた。だがこの試験は魔法関係者優先らしい。八百長とか無いわー。

とりあえず筆記試験と面接が終了した。面接官が二次小説で大人気の新田先生だった。はつきり言ってこれが一番難しかった。

一般受験者はこれで終わりだが魔法生徒は夜にも試験がある。ということ、現在その試験の説明中です。

「試験は簡単だ。こちらの高畑先生と戦うだけだ。負けたから不合格という訳じゃないが勝てる様に頑張れ。」

いや、普通に勝てないだろ。あの人強いし。

「それでは……」

始めっ……」

その言葉と同時に10人程の生徒が魔法を放つ。言い忘れたがこの試合は高畑先生VS受験者全員だ。受験者は大体40人位だ。

高畑先生は飛んでくる魔法を最低限の動きで避け、居合い拳を放

つ。それだけで何人もの生徒が脱落する。

戦いは一方的で殆どがともに抵抗出来なかった。何人かは居合い拳を避けたりもしたが、連続で放たれた居合い拳は避けられなかった。残るは私達だけ。すなわち私と妖夢だけだ。

「君たちは戦わないのかい？」

そう言いながら振り向く高畑先生。が振り向く動作中に大量のナイフを適当にばらまく、と見せ掛けて半分が跳ね返って直撃するよりに投げた。それと同時に妖夢が刀を構えて走りだす。

だが高畑先生は俺が投げた直後、つまりまだナイフがまとまっている時に居合い拳を放っていた。私の目の前には弾かれていくナイフ。
「やばっ」

と思った時には私は吹っ飛ばされていた。受け身を取れたのでダメージは減らしたが、それでもかなりのダメージを受けた。『ザ・ワールド』を使えばそれで終わりなのだが、反則気味なのでやめておく。

「はあああああ!!!」

ナイフが弾かれている間に接近した妖夢が斬り掛かる。だが高畑先生はそれを軽く避けると居合い拳を放とうとするが、私が投げたナイフに気付き中断し大きく後ろに下がる。

「妖夢、四分の三まで許可します。」

「分かりました。」

再び斬り掛かる妖夢。だが、先程と同じ様に避けられる。だが、うちの妖夢はそれだけでは終わらんぞ！

「何っ！！」

四分の三、つまり四本中三本の剣を使用する。しかし既に手は埋まっている。ならば何処で剣を持つのか？

横からの攻撃。全く予想していなかった高畑先生の頬に傷を作る。

「……中々やるみたいだね。」

三本目の剣は妖夢の肩の辺りに浮かんでいた。持ち手は白い何かに覆われている。意外！！それは髪の毛！！と、見せ掛けて半霊。妖夢は二本の刀を両手に一本ずつ持ち、半霊がアヌビス神を持っている。

そして妖夢が仕掛けようとした瞬間に

「もういいだろう、そこまでだ。」

どうやら時間のようだ。まあ妖夢が怪我しなくて良かったよ。

「とりあえず試験は終了だ。特に用事が無ければ帰ってもいいぞ。」

そして何事もなく帰る私達。

そういえば今回ナイフ投げただけじゃん！全然活躍出来てないし。絶対に妖夢>私 みたいに思われてるよ、これ。

Part・5 (後書き)

アンケートは3の両方に決りました。友人からメールで「3に一票」と言われた時は、死にたくなかった。リアルで恥ずかしかった。

キャラ紹介（前書き）

意味不明な内容です。飛ばしても構いませんよ？

キャラ紹介

東風谷早苗 人間

胸 普通

アーティファクト ハイエロファント・グリーン

早苗さん。咲夜や妖夢より早くディオ様と契約しており、真帆良には初等部から入学している。ので編入試験なんて受けない。

実は神の悪戯か、幻想郷の早苗さんの魂も入っており、日夜脳内会議を行っている。契約時にハイエロファント・グリーンが出たことよって、バッド・カンパニーをガンプラでやるという夢が崩れ去った。

技にアレンジを加えており、エメラルドスプラッシュ以外に星形の弾を手裏剣の様に回転させながら放つグレイソーマタージが使える。必殺技はハイエロファントを相手の体内に侵入させ、内側から無数の弾を打ち込む ビッグバンメロン。かなりグロい。

好きな言葉は努力

嫌いな言葉は脇役

好きなキャラはロボット全般

早苗（幻）「信じていれば奇跡は起こります！」

早苗「奇跡なんて起こりませんよ、ファンタジーやメルヘンじゃないんですから。」

鈴仙・優曇華院・因幡

ウサ耳

愛称は鈴仙 うどんげ

アーティファクト エンペラー

早苗と同期で初等部からいる。目を見ても狂気になつたりはしないが、相手の波長を見るくらいはたまに出来る。制服に違和感が無い。以前、早苗のビッグバンメロンを目の前で見せられ狂いかけた。しまむらにはあまり行かない。

束さん率いるウサ耳同盟に属しているとかいないとか

好きな言葉はウサ耳

嫌いな言葉は熱血

好きなキャラはロックオンの兄貴

「お前もウサ耳になれえー！」

キャラ紹介（後書き）

ビッグバンメロンって色々大丈夫ですかね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0956ba/>

転生者は咲夜さん？

2012年1月14日13時52分発行